

甲斐駒ヶ岳
戸台川本谷
落石事故報告書

昭和54年度

信州大学山岳会

(専政報告書(総括))

清川さんの事故以来4年、今日には山行専政の事案として表面化してきて、もちろん、この間に全く事故がなかったわけでは無い。つまり、事故の発生は、この間に全く無かったわけでは無い。幸いにして大事故に致したことがなかったわけである。

リーダー会員になる2年間、山行自体も大胆な意欲が、スケールの大きなものを目立ちている。このことはよい傾向である。しかし、そればかりでは、危険な状況に陥る恐れがある。計画を立てては、いかに下すのか。

また、高度な登山山行において、リーダー、メンバーに十分な知識、スキル、つまり検出にかけられるようなルートにリーダー会員の許可が得ていない面もある。

意欲的な山行は非常に楽しいことであるが、リーダー会に十分な訓練が必要なことであろう。

事故自体もまた、場合、主原因となるのは慎重さの欠如である。技術的に云々する前に慎重さと自分の力を十分に把握して行動することを見守りなければならぬ。

石塚君の事故も頂上に具体的な対策を考えた。ことごとくからでは無いが、リーダー会の不手際が事故を招いたことは大いに反省すべきであろう。会として、多々面に御迷惑をおかけしたことをお詫言ひし可。避難救助にあたり、下さった方々に多大な感謝の意を表し可。

信州大学山岳会 竹之内秀実

今回の石巻川の落石事故についての報告を行ない、
 是非と共、リテ-会の反省、これからの方針を順次述べ
 てゆき、会のあり方、山行のあり方ともう一度再検討する
 こととする。

(専政報告)

1. 山行名及び山行計画

山行名 甲斐駒ヶ岳周辺の沢登り

リテ- 山本 雅夫 (理-Ⅱ)

メンバー 石渡健司 (理-Ⅱ) 吉岡道泰 (工-Ⅱ) 白洲 昭 (農-Ⅰ)
 佐々木正博 (農-Ⅰ) 近藤

期日 昭和54年7月27日～8月2日 実動5日 予備2日
 予定コース

1日目 松本 ~~——~~ 北沢 ~~Taxi~~ 竹草駒ヶ岳神社 - 尾白溪谷 - 白根の岩小屋

2日目 BP - 尾白川本谷 - 六合石壁 - 赤河原 - 戸台川本谷 BP

3日目 BP - 甲斐駒ヶ岳 - 黒戸崖根 - 白根の岩小屋

4日目 BP - 黄蓮谷右俣 - 甲斐駒ヶ岳 - 北沢峠

5日目 BP - 戸台 ~~Bus~~ 伊那 ~~——~~ 松本

Essen 合宿時の主食分量 質とも充分である。

装備 設置具は各自のみ
 登山具 共16/12mmのV
 2000円程度の
 その他小物類

個人装備 一式
 防水靴は3277円
 のみ

2 事故経過報告

27日 ① 竹平駒 + 長神丸 - 黄蓮谷 出合 - 尾白川本谷 1800m 旭東 BP

28日 ② BP - 六合石室付道 - 赤河原 - 尾白川本谷 - 本谷 2400m 旭東
事故発生

14:30 ③ 石渡が浮き石をくずし、それに腰を打ちつけられ、強打
自刃脱出を至るが、いかに動けず、しばらく様子を見る。

症状：打撲、腰痛、涙道から出血

歩行不能と判断し、救助活動を行なうことになる。

15:30 山本(Ⅳ) 近藤(Ⅰ) が救助要請
と丹波山荘へ向う

石渡は沢中の小まな平班
に搬し、保温、防水に注意

18:00 丹波山荘着、現役留守本部、中野
病 認識案に電話連絡、認識案

する。吉岡(Ⅱ) 田淵(Ⅲ) 休
木(Ⅰ) は残り、2看護にあたり。

吉田と連絡がとれる。長谷科 萱刈協
伊那署に連絡、スーホートの要請

症状：出血は停止するが尿
が出ない。下腹部から万打

両親への連絡、再度認識案に連
絡、救助を依頼する。

にかたじけなく、お世にせ行
食の物、お助け、お世話です

20:30 スーホート到着、使用不可能
と判断、萱刈協への救助隊要請

仮眠

隊を編成する下めに村へ帰る。

29日

3:30 吉田、保、川、下田到着、山本を急いで5人は避難

と下り現場へ向う。近藤は2日の科長を兼ね、10日現場へ到着

10:00 @ 吉田 片山 山本 現場到着

10:10 二保 下田 現場到着

10:30 工具を使、石渡を背負い、稜線を上げて行く。この時の装備及び食料は不足。途中、石渡に銀粉剤をある。左岸を巻く。右岸石のハトラス。

15:40 @ 救助隊(遭難協)及び近隣 島谷(元部員) 加藤(元部員) 原崎(元部員) 山田和彦(元部員) のコールが聞える。

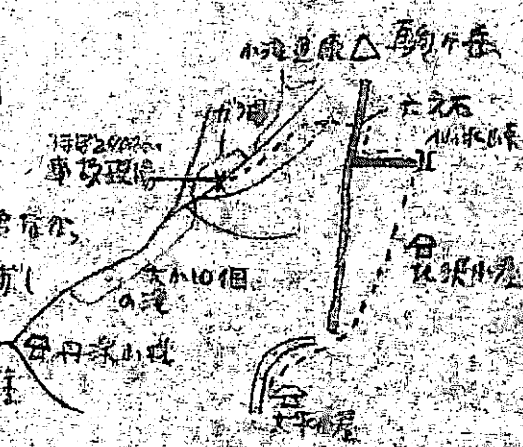
16:15 大平小屋着 石渡を背負うに成功して下山

18:15 @ 北沢小屋着

20:20 @ 大平小屋着 救急車到着 山本 山田和 同乗 伊那中央病院へ

② 事故現場の状況及び事故発生の原因

事故現場は広いが場所が大平小屋の堆積した場所である。ルートについては異常な下を思われる。石渡は滑り石を一つだけおとし、ほかの落石を誘発した。おとしはるまじりとした。石渡の場所として不注意が事故の原因であったと考えるべき。



③ 救助活動における反省点

① 救助にあけられるのは部員向にOBとの連絡が不明瞭である。これには有線と無線の両方の受話器を合して聞いたり、無線であったのが声が遠くよく聞えたりした。これはよくあることである。また、山本が救助する際、事故通知書を見ながら、しかも山本が救助する原因がある。しっかりと連絡をとるべきであった。

・現役留學本部が不在であったため他の部員への連絡が
できず、下。二ははあらざるべきことである。
・申請を受けて出勤した部員の名義、現地に着く予定時間
などのことが山本の身へ反対に連絡されたため、以後の判
断にできなかった。

遺失協への求助申請について

・遺失協及び伊那署の人がスノーボードを運んで来たとき、時英と
連絡がとれていたのは吉田のみであったので、求助申請をしないこと
ならなかった。

求助活動について

・求助に来た部員2人が運動靴であり、残りの2人が靴を所持
しなかったため、沢峠-鳥喰峠-大石を經由で行くことにした。カ
ズ、212、青田、山本、片山の3人は靴を履かずに1時間ほど
いた。基本的なミスであった。

・遺失協のBが他による別動隊との交信がとれなかったため、こ
ういったことは3人で求助が大幅に欠けている所であった。連絡を密に
取りたいことも求助における基本的なことである。

4-7-1と2の反省

事故発生後の石痕の症状の把握は非常に高かった。下
2件に留意の場合のことを考えながら処理したのせいである
が、症状の正確な把握、求助活動についての知識が足
らなかったため、各所で判断のミスが重なった。このため、
緊急時のリーダーの判断は的確さと迅速さを要求されるが、
その心算がしきりに身に沁みを感じた。

以上 山本

5. 会計報告

出費の大部分は石渡の父兄によりて支払われながら、小規模な補助活動でもかなりの出費を強いられることと痛感した。保険でもかなりの範囲を大きく上回った場合の金策にはより多くの問題が生ずると思う。

いざという時の資金を考えた上必要がある。

- ・南ア地部連対協への出費
 - 救助人員費 ￥721,810
 - 山荘保険料 ￥209,600
 - 食料 ￥108,683

- ・その他の出費
 - OB交通費 ￥9700
 - 現役交通費 ￥14200
 - 食料 ￥5200

計 1069193円

詳細 宮崎 伊那-戸台 往復2回
伊那-大平小屋 往復1回

29日昼別 ￥3155

電話 ￥100.00

井関 松本 - 大平小屋 往復

山田和 松本 - 長谷村 //

山田和 松本 - 伊那 //

吉田 松本 - 伊那 //

聴身保料関 117天往復 ￥2960×2

伊那往復 ￥2000

一保 食料 ￥2076

指費 車代 ￥2000

手紙 (随筆部) 車代 ￥2000

以上加算

(SAC リーダー会より)

次にこの遺囑に照してリーダー会の反省を行う。

まず遺囑が起った原因と考察のSACの状況はどうであつたか
そしてこの山から事故を未然に防ぐための事故防止対策はどうあるか
それについて万一事故が起つた場合の事故処理はどうあるかの3点を軸に
話し合ふこと。

今年のはじめより、磐梯、松本山岳部(SIMAC)と上野山岳部
(SUMAC)は右側して合流、個人山行をするようになった。従来は
互いにこのリーダー会が独自に山行の計画、実行をしてたが、特に
最近交流が深まり、個人山行と共にすることが多く、また一部階級
の減少もあり、「一緒にやろう」ということでSACのリーダー
会がすべての山行を担うことになる。こうした組織が大き
く、下のに待つ意味の(1) 山行をリーダー会におかすと自問すると、それは
十分注意して行ふ必要がある。SIMAC、SUMACの山行の場合
的方面が参加にあつたと言ふ(2) 5身を以上の山行の許可基準や1身
用志の山行許可についての正しいことや、(3) 救助の手順をいふこと、
(4) 万一事故が起つた場合の処理のこと、
い風情の向上、 右側がリーダー会にあつたと言ふ。私は、2年
と上野山岳部経験し、計画の中心に際しては、十分に注意を払い
先達達に十分な注意を通り、講習して来たつもりであつた。が、
前を振り返ると、先の方のことが指摘される。(4) 1年、2年
層の層がこれらも、(2) (3) (4) の3つは、この山行 のためである。層の層

とと念とのつらさを解くとこのようになると思ふ。實際は山行であれば
やはり事前を置くことも必要である。善悪を後述して置く
及指する。

次に、これから事故を未然に防ぐための事故防止対策をとり、可能な
限りか具体的にみて行く。

まず、登山に必要の基礎知識の養成を講ずること。これは、今まで個人
の登山トレーニングが中心に行われていたが、これからは団体・何回かの
合同トレーニングを実施すること。これは、互いの経験や技術上の相違
がある。

次に、登山の基礎知識の徹底を計ること。特に、登山者が注意すべき
後述の登山者合宿、登山者合宿前に登山者合宿と上級者講習をとり
徹底して行く。登山者合宿と同じように、登山者合宿で各々が登山者合宿
が重要と思ふ。危急時にも対応する行動計画を立てるために必要
要件としてある。

そして、と念が行う山行計画は、1ヶ月恒重とし、行先は必ず
しかし、段階的にそのペース、量、時間について評価していく。こ
れからいふら大丈夫という早急に行うべきである。急いで許可の程
度と明確にして行かざるべきである。

では、万が一にも事故が発生した際の対策はどうあるかについて。
まず、救助連絡が可能なように行先には緊急連絡を中核とした連絡
系統を確保すること。これは、登山者合宿、山行中いつ事故が発生しても
手が届くように、緊急連絡の確保は必須にしておくべきである。これは、

これに 扶助法等の訓練を行ふ必要がある。これらの訓練には 専門
技を習得し、左側にわたる 各種の 技術と 習得し かつ 深く 学ぶ 必要
ある。今回の 援助活動 にかゝる 下 各種の 専門の 技術 である。その ために
も 援助者の 種々 (通称 職業) を し かり 行う 必要 である。

以上 どの 時に 現況 入 習得 した 下 する 必要 である。これは 出 習得
した 場合 とも 同様 である。 実際 事 業 として 行う 必要 である。
我 ども や 医療 補助 の 面 には 現況 の 方 での 必要 である。 以上 述
ぶ こと である。 以上 述 ぶ こと である。

以上